
人間はクズ いや、俺は人間のクズ。

lx水龍xl

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人間はクズ いや、俺は人間のクズ。

【Nコード】

N2301Y

【作者名】

1 x 氷龍 x 1

【あらすじ】

学校1のイケメンが主人公。残念なことにそいつはオタクだった。そんなイケメンが恋をしちゃいました！てへぺろ いろんな壁を乗り越え末永く暮らしていけるのだろうか？！

俺は、高校生。

俺は、高校生。

嘘だと思つか？本当だ。

そこ疑ってくるのか貴様、これだから人間は…。

おっと済まない。

俺は、高校生。

帰宅部オールスターズの一員だ。

俺が幼稚園児の頃に立てた将来の夢。

「仮面ライダー」

馬鹿か。アホか俺は。

2次元と3次元ごっちゃにしてんじゃねえよっていう。

んで、今更だが自己紹介。

中村 浩太と申します、はい。

え、読めないの？ 本気で言ってるの？

笑えるわぁー なかむら こうた って言います。 クスッ

まあ、今となつちや将来の夢なんて、ちっぽけなもんだよ

俺はこのまま、普通に卒業して、普通に大学入って、普通に就職して、普通に稼いで、普通に結婚して、普通の生活を暮らしていきたい。

学校では割と静かな方。

まあ、べつにそこまで人に好かれてるわけでもなく嫌われてるわけでも無い。

でも、残念なことに俺は人が嫌いだ。

みんな、高いとこ行ったことあるか？

うんちやらタワーとか、ゴニョゴニョツリーとか。

そっから見てみる、蟻がうようよしてんぞ、蟻が。

その蟻が人間。そしてその人間に一人に俺がいる。

とても悲しく思えてくるぜ

みんな、グラセフとかやる？（著作権的關係で若干変えています）俺さ、最初にも言ったけど、帰宅部オールスターズの一員なんだ。オールスターズの中でもナンバーワンを争うゲーマーなんだ。グラセフで何回人を殺したと思っております？
「たく、人間って脆いな。うん。」

こんな僕にも、好きな人がいます。
いや人間は嫌いだよ？

でもさ、カワイイ人は別だよノノ
性格地味です。

まあ、帰宅部オールスターズとか言われちゃってますからね。
でも、意外とイケ様って言われるんです。

もったいないって言われます。はい。

なんで、若干髪とか気にしてます、ワックスバリバリです。
あとけっこう見た目はモテる要素たっぷり詰めてます。

でも、地味なんです。

で、ここまでしゃべってきて、なにが言いたかったかというと、

「内面地味ちゃんのイケ様が狙う！ アイツの彼氏は俺だけだ！」
っていうね。

でもね、俺ね、女子との関わり方と変わらんのよ。

帰宅部オールスターズに聞いても、

「とりあえず触っちまえよ ぐへへへへ」

「ただただ見つめるんだ。相手の目を…じつと…そして…逃げろ」
俺が駆けつけるから呼んでくれよ」

パツと見変態内面変態しかいねえからこんな感じの答えしか帰ってきやしねえ。

そんな俺がアイツのハートをキャッチして、無事結婚 できなね。
そんなHappy Endで終わればいいなと思ってしまう。

さてと、登校しますか。もうソロ8時15分。
うん、やばい

俺は、高校生。(後書き)

ぜひとも感想評価お願いします。

おうし座1位の俺だぜ

キンコーンカーンコーン

チャイムが鳴った。

俺は今、下駄箱にいる。

「おい！中村！もうチャイムなってるぞ！」

先生だ。このセリフ、ほとんど毎朝聞く台詞だ。

「あ、はい、すみません。」

ガラガラッ

「おはようございます、中村君。2分遅れてますよ？」
担任にも言われる、同じ事を何度も言われると腹立つ。

「あ、はい、すみません。」

先生の長い連絡事項を聞き終え、授業が始まる。

「あーい、席つけえー」

先生の華麗な登場だ。

これは現国の先生、かなりダルそうな先生なんだ。

授業中いつも俺はあることをしている。

それは

『山本 春菜の観察日記』

ああ、山本春菜ってのは前話した俺の好きな人。

「浩太くん？」

「そうそう！！ハルはどう思ってたのかな？って！」

「うーんとねえ、あたしは……」

来い！来い！

良いコメント来い！

「かつこいいと思う！」

うぎゃあー！

え？！え？！マジかあ！！

「でもね、ジンミツ」

ですよねえー

帰宅部オールスターズですもんー

「アレで、性格優しかったら絶対もてると思う！」

性格か！よっしゃ！

イメチェンしようかな！

「性格良かったらハルは好きになる？」

「うーん、候補にはなる可能性もなくはない！」

イメチェン確定

「そっかあ！ごめんね！イキナリ変なこと聞いて！」

「いやいや、いいんだよ！（笑）」

「え？あ、うん、いいよ」
「やったあ」

え、なにこの展開？！
女子と二人で帰るんって初めてだ！

「うち、浩太くと話すの初めてかも！」
「お、おお、そうだな」
「なんか、照れるねえーっ！」

うお、何だこいつ…
け、結構カワイイじゃねえか…！！

「家どの辺なのー？」
「あの、セブンの裏あたり」
「へえー！結構近いんだね！」
「そ、そうだったんだ」

やべえ、何だろっこの気持ち
なんか、変な感じする。

「あーちゃんー！！」
「あ、ゆうちゃん！」

うっわ、気まず！
え、なに、友達？
まじかよ、くっそ恥ずいじゃねえかよ！

「お？お、お、お？ いい彼氏つれてんねえ、あーちゃん！（笑）」

「や、やめてよぉー／＼／」

か、彼氏…!!

「彼氏なんでしょー? (笑)」

「ちつ、違うよ! ただの友達だよ!」

友達…。

俺、友達いたんだ…。

旭日、俺のこと友達だと思ってくれてたんだ…!

「ねえねえ! イケメン君! どうなの? あーちゃんの事好きなの?」
笑)

「やつ、ゆうちゃん! やめてよ!」

え? 俺?

「い、いや、俺は別に…」

「ほ、ほらね! だから言ったでしょ!」

「なあってんだ! つまんないなあ (笑) あ、ウチ家ここだから!」
「じゃあーねー!」

やつといなくなった。

何か、もう、怖かったw

「ご、ごめんね浩太くん!」

「ああ、気にすんな」

「ありがとう 優しいねッ!」

優しい…!!? ?

俺って、優しいのか?!
もしかしてコレは、来たんじゃないかね?!

「浩太くんってさ、いつつもなにやってるの?」
「いや、特にこれといったことは...」

嘘つけ!

ゲームしかやってねえだろ!
モンハンばっかだろ!

「そうなんだ!じゃあさ、きょうこれから空いてる?」
「きよ、きょう?え、えっとー、う、うん。空いてるよ」

テンパリ過ぎ!

俺テンパリ過ぎ!
ってか、きょうウカムの最速タイムだすんじゃないかねえのかよ!

「やったあ じゃあ、一緒に出かけよ!きょう、暇なんだア!」
「そ、そうなんだ、俺でいいならね。」
「全然いいよ!むしろ浩太くんがいい!!」

俺がいいだと...!
嬉しいぞw

「じゃあ、きょう帰ったら4時にセブンに集合ね!」
「わかった」

「じゃ、ウチこつちだから!」
「おう、じゃ」
「ばいばい」

ふう

落ち着いたぜ。

きょう俺は初めて女子と二人で帰った拳句二人で遊ぶだと？
おうし座1位の力ハンパねえ！

よっしゃ！

俺が持つてる中で一番おしゃれな服来ていこつと！

うし、準備完了！

行くか！

おうし座1位の俺だぜ(後書き)

感想、評価お願いします。

シャッター音は、人をも傷つける。

俺は待ち合わせ場所に向かった。

「浩太クーン！」

「あ、どうも」

「って、え?! ちょ…何そのカツコ!」

俺の中では一番のおしゃれだった。

なんか、すげえシヨック。

「でも、浩太くんはそういうのが似合ってるのかもね! (笑)」

なんだそれ、褒めてんのか、バカにしてんのか
どっちにせよ、変なことには変わりないだろう。

「ようし! じゃあ、行こっか!」

「…おう」

二人は歩き始めた。

特にこれといった場所はなかったため、うるちよろしてるだけだった。

俺は、結構面倒くさくなっていた。

と、そこで…

「ねえねえ、あれ知ってるー?」

旭日が何やら洒落たボックスを指さしていった。

「全く知らん」

「あれね、プリクラっていうんだよ!」

プリクラか…、なんか聞いたことあるなあ。

「ここで問題です!」

「え?」

「プリクラとは、なんの略でしょうか!」

知らん!全然知らん!

プリクラだろ?

プリプリクラシツク?

プリンくらいの大きさ?

全然分からん!

「あの、そういうの全く分かんないんだけど…」

「あ、ごめんごめん(笑)正解は、プリントクラブだよ!」

「へえー」

知った所でどうしようもない知識ゲットだぜ!

「んでさ、あれ、行かない?」

「え、まあ、いいけど、あれって何すんの?」

「写真撮るの!」

「ふ、二人で…?」

「そっだよ」

お、おお、まじか。

まあ、初ってことで、撮ってみてもいいかな

「へえー、そうなんだー」

「いい？」

「うん」

「じゃあ、行こう」

中に入るとそこはなんか変な感じがするボックスだった。

後ろには緑のシートがありこんな背景で写真取るのかと思いますます変な感じに

『お金を入れてね！』

え?!カネカカルノ?!

「今回は私がお金払ってあげる！」

「有り難き幸せ」

良かったぜ、こんな所で無駄金使ってる場合じゃないんだ!

旭日は、一人でキャツキャツキャツしてる。

「ねえ、浩太くん取るよー?ホラホラ、携帯いじってないで!」

「ん、ああ、悪い。」

携帯でツイッターしてたんだ

『プリントクラブなっ』

「はい、チーズ」

パシヤあああああああ!!!

「ウオッ……!」

「どうしたの?」

「いや何でもない。」

音デケエ!

不意打ちだったぜ!!! WW

「このプリクラシャッター音が異常だからね」

なぜ他のを選ばないのだ、小娘よ。

「もう一個撮ろ!」

「はい、チーズ」

パッシャあああああああああああ!!!

うるっせえよ!!!

耳破裂するわ!

「よし、完成 あとはでこるだけ」

デコってる間、暇な私です。

Twitter「シャッター音は、凶器だった」

「できたよー!!!」

「おう、さんきゅ」

デコるセンスがめちゃくちやすごかった。

帰ったらPSPにでもはろうかな。

それにしても、この辺は人が多い!

気持ち悪い!

最近是人馴れしてきたけど、でもやっぱり嫌いww
知ってる人とかなら結構行けるようになったぜ!!

俺はその後もさんざん旭日のショッピングに連れ回された。

「今日はありがとね!付き合ってくれて!」

「うん」

「じゃあ、今日はこの辺で!」

「ノシ」

家に着き、まずはPC起動。

それと同時にPSP起動。

早速モンハンを!!

「あ、そういえば」

きょう撮ったプリクラを見た。

「PSPに貼ろ」

PSPの裏面に貼った、意外といい。

自然と笑顔があふれた。

「よし!ウカムいこう!」

最善の装備で俺はウカムの狩りに向かった。

こんな時間を過ごしながら、現在時刻は、午前4時。

「ハンゲも飽きてきたなあ。そろそろ寝るか」

俺は平均睡眠時間2〜3時間と少なめ。

授業は寝ずに受けている。

もう、睡眠しない生活にも慣れている。

常にゲームやってる俺は目が悪い。

そんなもんでしよう。

「うし、寝よう。」

こうして、浩太の長い長い1日は幕を閉じた。

シャッター音は、人をも傷つける。(後書き)

感想評価お願いします。

「狩り行こうぜ」

コケコッコー

朝ですわよ

俺はカーテンをズバツと開けた。

「うん、清々しい朝だ」

俺は太陽様にそういつてから、朝ごはんを作り始めた。

実は、彼は幼いうちから両親を亡くしている。

物心がついたときにはもう一人暮らしをしていた。

「あつ…ウインナー焦げちゃった…」

料理は得意でもなく下手でもない、至って普通の腕前だ。

でも、周りの男子に比べるとなかなかできる方。

モテる要素の一つでもある。

「えつと…今日は…土曜日か、学校休みだ。あ、きょう友人来るんだった。」

俺は、朝ごはんを食べ終わると食器を洗い、リビングの片付けを始めた。

一人暮らしだとそんなに散らかることがないため、片付けは結構早く終わった。

俺は友人が来るまで「いいとも！増刊号」を見ることにした。

「つたく…青木のやつ遅いなあ…」

予定時間から10分遅れてインターホンが鳴った。

「やつときたよ…」

俺はモニターを見ず青木だと思いドアを開けてしまった。

ガチャッ

「はい」

するとそこには…

青木が立っていた

青木 「おいつす」

俺 「おせえし」

青木 「おいつす」

俺 「はいって」

青木 「おいつす」

俺は若干イラッとした。

こいつは、青木 遼太郎って名前だ。

もちろん、帰宅部オールスターズの一員だ！

今日はこいつと一狩り行く予定だ。

「まあ、そこ座れよ」

「おう、さんきゅうです」

俺は冷蔵庫からコーラを取り出した。

すると後ろからのすごい視線を感じた。

そして俺はそのコーラを戻してオレンジジュースを手にした。

そうするとその視線は消えた。

「わかってらっしゃる」

「そういや青木、炭酸だめだったんだな」

俺はとりあえずPCを起動させた。

背景画像は2次元の世界へ引きずり込まれるかのような画像だ。

「おい、背景チルノじゃねえのかよ。」

「俺は、チルノはそんなに推してねえからな」

「わかってねえなあ」

俺は真つ先にニヤニヤ動画のトップページを開いた。

『にーやにーやどーがっ』

青木が口を開いた。

「モンハン行こうぜ」

「ん、ああ、いいよ」

「なに行く?」

「そうだなあ、俺今特に足りてない物はないんだが」

「んじゃあさ、銀レウス手伝って。シルソル作りたいんだけど若干足りないから」

「あ、いいよお」

「捕獲しますんで」

「了解。」

慣れた会話で話をすすめる。

「じゃ、準備おっけー?」

「いいよ」

「行きまーす」

『ぶうぶうー』

ここから、俺たちの銀レウスとの死闘が始まった

「狩り行」ごせ(後書き)

感想評価お願いします

モンハンの世界へようこそ

「さあ、ショータイムだ。」

俺らは狩りの世界へ

これからは、ゲームの中にいるという設定で話を進めていきます？

ここは溪流。

上位クエストのため開始位置はバラバラだ。

「とりあえず合流しなきゃなー 千里眼でも飲むか」

ゴクツ シュパキーン！

「オオー、見える見える！」

俺は青木を探しに向かった。

「マップの6か」

一方その頃青木は…

「アイツのことだから千里眼でも飲んでこっち来るだろう、はちみつ採取でもしてるか！」

バサツバサツ ズドオーン

「んー？何の音だ？ って、え…」

銀レウスの登場です。

ですが、まだ銀レウスは気付いてないようです。

「気づかれる前に逃げなきゃ… 抜き足差し足忍び足。抜き足差し足忍び足。」

キヨロキヨロ キヨロキヨロ ン？ ギロツ！

「バレた」

ダァーッシユ！！！！

逃げるおー！！

そこに浩太がやってきた。

「おーっす、来たよおー って、なんにやあああああー！！！！」

「今くんのかよお前！逃げる！とりま逃げる！」

なぜ戦わないのかわからないが、逃げまわる二人。そこで浩太が気付いた。

「おい！そっいやお前、なんで逃げてんだよ！」

「え？」

「戦えよ！！」

「その手があったか！」

二人はやっと戦う気になった。

今度こそ俺たちの銀レウスとの死闘が始まる。

モンハンの世界へようこそ（後書き）

感想評価お願いします

戦闘開始

ここから、二人の死闘が始まる。

「よっしゃ、行くぜ！俺がこの大剣でぶった切ってやるよ！」

浩太は潔くそう言いながら、剣を構えた。

「俺様の双剣が火を噴くぜ！！」

青木は双剣にキスをした。

一瞬双剣が赤くなったように見えたのは気のせいだったのだろうか。

「ギヤアアアアアア！！！！」

銀レウスは大きな声で咆哮した。

浩太は大きな大剣で咆哮をガードした。

そして、銀レウスは口元で大きな火の玉を作り、俺らに向かって3発はなった。

二人は見事すぎる前転で躲した。

「攻撃開始……」

青木がそうつぶやくと、双剣をクロスさせ天高く掲げ、鬼人化をした。

そして、目にも見えない速さで銀レウスを斬り刻む。

「これが俺の素晴らしき乱舞だ。」

銀レウスは前足で青木を叩きつけようとした。しかし、そこには青木はいなかった。もうすでに、銀レウスの懐にいた。

「まったく、遅いんだよ。ノロマちゃん」

再び目にも止まらぬ速さで切り刻んだ

浩太は重い大剣を担ぎながら、銀レウスの頭に向けて剣を振りかざした。

大剣は銀レウスの頭を一刀両断！

「隙だらけだぞ？」

浩太はそういうと大剣に力を溜めだした。

「うおおおおおおお！！！」

ズバアアアアーン！！！！

大きな大剣は銀レウスを斬りつけた。

銀レウスはあっという間に瀕死状態。捕獲のチャンスだ。

「よし、罠を仕掛けるぞ。」

浩太が罠を仕掛けた。

すると、青木が罠の方へおびき寄せた。

ズボン！

綺麗に畏にはまった。

「行けっ！捕獲用麻酔玉！」
モンスターボール

モンスターボール
捕獲用麻酔玉は銀レウスに命中。
銀レウスは眠りについた。
そう、捕獲は成功したのだ。

「よし、捕獲完了」

この二人にとつたら銀レウスなんてその気になれば、スズメのよう
なものだ。

寝顔がとても可愛い。

「おつかれえー、はちみつ行こうぜ。」

「あ、俺もう行ったよ」

「マジカ、じゃあ、一人で行ってくるわ」

こんな感じで俺達の戦いは終わった。

ココから3次元へ戻ります？

浩太「うん、弱かったね、一人で行けないの？」

青木「いや、余裕だけども、毒になったとき結構困るんだよね」

浩太「あんなの余裕でかわせるしょ」

青木「マジで？俺結構食らうんだけど。」

浩太「まじかい、俺は、飛ぶときについでに火はいてくやつあるじ

やん、あれめっちゃ喰らう。」

青木「いや、あれは余裕のよっちゃんで躲せる。」

やはり、プレイにも個性があるようだ。

青木「もうこんな時間か、俺帰るかな」

浩太「マジで？早くね」

青木「きょう、用事あるんだよね」

浩太「マジか！じゃあ、また明後日ね」

こんな感じでいつも一日を過ごす。

浩太は片付けを始める。

また、今日もニヤニヤ動画の生放送を開始する。

いつも2時間くらい放送する。

そのあとは録画していたテレビをみたり、借りてきたDVDを見たり。

そうして、浩太の長い一日は幕を閉じた。

戦闘開始（後書き）

感想評価お願いします

暗黒のメール

朝、目が覚めた。
そりゃそうだ。

いつもどおり飯を作って、飯をくって。
片付けをして、ゆっくりする。
そして出かけようと思ひ玄関に向かった。
すると、郵便受けになにか黒い封筒があった。

「ん？なんだこれ…」

その封筒には、なにも書いてなかった。
とりあえず中身を開けてみた。
そこには一枚の手紙が

「な、何だと…?!」

浩太の体から汗がたらたらたれてきた。
その手紙にはこう書いてあった。

『お前の今一番大切な人を拉致した。今日の午後9時に碧唯凱旋門あおいがいせんもんに来い。』

その手紙の一字一文字の字体が違った。
とても奇妙なものだった。

「どういうことだ…。俺の、今一番大切な人…。まさか…、春菜ち

やん……！！！！」

浩太は一体何が起こっているのか、なぜあいつが拉致されたのかわからず、混乱状態へ陥ってしまった。

「何故だ…何故だ…何があったんだ…！！」

俺は午後9時までそわそわして待ちきれなかった。そして、午後の9時になった。

浩太はちょうどジャストに碧唯凱旋門についた。

するとそこにはたくさんの人だかりができていた。

そして、チャイムが鳴った。

ジリリリリリリリ…！！！！

すると、大きな門が開いた。

みんな一斉に中へ入っていった。

それに流れるように浩太もなかへと入っていった。

中は広がった。

ステージのようなところにスポットライトが当てられた。

「さあ、皆さん！お越しいただき誠に有難う御座います！」

タキシードをきた男の人がそういった。

すると周りに人たちは

「どういうことだ！」「俺の嫁さんを返せ！」「急に拉致して何がしたいんだ！！」

みんな、浩太と同じ理由で集まってるらしい。

「静かに！今は質問時間ではありません。勝手に口を開いたものは処罰を与えますからね。気をつけて。」

男性がそう言うのと周りは一気に静まり返った。

「申し遅れましたが、私は おくむら たくや 奥村 拓哉と申します。」

彼は律儀に深く礼をしたあとまた淡々と説明を始めた。

「ようこそ、世界最恐のゲームへ。」

心の声ーゲームだと？ふざけんな。俺は春菜ちゃんを助けに来たんだ。ゲームなんかやってる場合じゃない！

「これより、ルールの説明をします。ルールは至って簡単！」

そついうと後ろからスクリーンが降りてきた。

「まずはこちらをご覧ください。」

すると、スクリーンにある映像が流された。

そこには手足口を縛られた状態で吊るされてる沢山の人達が。そこに、春菜ちゃんがいた。

「……！春菜ちゃん……！！……！！」

思わず声を出してしまった。

「おい！誰だ今喋ったやつ……！出てこい……！」

浩太は危険は察知したのか、名乗り出ることはなかった。だが、周りの人は誰が喋ったか知っていた。みんな俺の方へ視線を向けた。

「ほう、君か。ちょっと前へ来い。」

すると、近くにいたSPに掴まれ、前に連れて行かされた。

「何だ、君。先ほど喋るなどいったはずだ。いい度胸じゃないか。」

そいつの顔は悪に染まっていた。

「駄目だ…こんなの、駄目だ……！」

浩太はついついその言葉にしてしまった。

「何だ、私に文句でもあるのか？え？」

浩太は、我慢しきれず言ってしまった。

「こんなの止めましょう……いったい俺らがなにをやったって言うんだ…！俺たちの大切な人を拉致してなにになるってんだ！いったい何が目的なんだ？俺らをこんな思いにさせて、何が楽しいんだ！」

浩太は思っていることすべてをいった。

「ふっ、面白い。こんな奴がいるとはな……おい、こいつ、このまま生かすとけ。」

拓哉がそう言うとSPがまた浩太をみんながいる方へと連れていってくれた。

「さて、取り乱して済まない。ルール説明の続きだ。いま見てもらったように、お前らの一番大切だと思っっている人をこのようにして牢獄へ入れてる。そして、ここからこいつらのいのちをかけたゲームの始まりだ。何個かのステージに分けて人数を減らしていく。このゲームで残った一人だけが、大切な人と一緒に元の場所へ戻れる！だがしかし、それ以外のヤツらは、そのまま野放しにされ、大切な人は死ぬ。ルールは以上。あとは各ステージに進むことに説明する。いいな。」

拓哉はそう言うと、ステージから降り、何処かへ歩いた。

「死ぬ…だと…？ ふざけんじゃねえよ… どんなゲームかわからない。何が起きるかわからない。でも、俺は春菜ちゃんのために絶対1位になってみせる。生き延びてみせる！！」

そうしてこれから、悪夢のゲームが始まる。

暗黒のメール（後書き）

感想評価お願いします

1 r d S T A G E ルール説明

「はい、みなさーん、ちゅうもーく」

拓哉がそう言つて、ステージに登つた。

そして、みんなの視線は拓哉に集まつた。

「それでは！ファーストステージを開始します！」

多少のザワつきがあつた。

ここでは何が起きるかわからない。

常に警戒しておくことにした。

「一回しか言わないですからねー、ちゃんと聞いててくださいねー、難しいですからねー」

俺はゴクリとつばをのんだ。

手汗が半端ない。

「それでは、ルール説明にはりますが、その前に！2人1組のパートナーを作つて下さい。」

パートナーだと？

一体何をしようとしているんだ…。

とにかく今はパートナーを探さなきゃ。

「あのおー、すいませーん。えくすきゅーずみー。」

「あ、はい。」

一人のカワイイ系の男の人が話しかけてきた。

「僕と、パートナーになってもらえませんか？ あの、さっきのやつ見て、すごいなあって思ったんです。一緒にいれば、死なない可能性上がるかなあって。よろしいでしょうか？」

パートナーに誘われた。

「まあ、はい、いいですよ」

やった、パートナーが出来た！

さっきのやつみんな見てたから来ないかなと思ったなら逆に来た！

「あの、僕、梶原 祐悟かじわら ゆうごといいます、よろしくお願いします！」

「ああ、おれは中村 浩太。よろしく」

祐悟は絶対もててると思う。

カワイイ系でもててると思う。絶対。

「はい、皆さん、パートナーで来ましたかー？」

拓哉は周りの様子を見て、出来たことを確認。

そして、また説明を始めた。

「はい、ルール説明をします！まずは、皆さんにこの「ヒュペノイドバッチ」を、お配りします」

すると、SPたちが一人一人にこの「ヒュペノイドバッチ」を配り始めた。

数分たって、拓哉が口を開いた。

「皆さんの手に渡ったようなので説明します。このバッチは、いわゆるライフです。」

と言うことは、このバッチがなくなったら負けってことか。負けることは死ぬことだ。気をつけよう。

「今回はトランプゲームです。トランプ4種類の1〜5とジョーカーのカードを使用します。それを、赤と黒のカードで二種類に分けます。そして、パートナーと二人でその固まりを分けて下さい。ちなみに、ジョーカーにも赤と黒があるのでそちらも分けて下さい。それが持ち主の手札です。パートナー同士で勝負します。まずはジャンケンをし、先攻後攻を決めます。そして、先攻からカードを裏向きにおいていきます。その時、置くカードの名前を宣言しながら伏せます。そこで嘘をついても構いません。たとえば、ダイヤの3を伏せながら”スペードの4”といってもいいということです。そこで相手がカードを伏せた時、それが嘘だと思えば”チェック”と、本当のことを言っていると思えば”通し”といって下さい。チェックした場合に、それが嘘だった場合、嘘ついたプレイヤーはそこにあるカードをすべて手札に加えます。もしチェックした場合に相手が宣言通りのカードを出していた、場合そこに溜まっていたカードをすべて自分の手札に加えます。通しの場合はいちいち確認しません。そして、最終的に手札が先になくなった人が勝ちです。勝った場合相手のバッチを自分につけ、ゲーム終了です。まず、ここまでで何か質問は？」

長い！長すぎる！

でも、大体は把握できた。

未だ有るのか、難しいゲームだな。

「無いようですね、では、続けます。出すときのルールです。自分がカードを伏せるときにルールがあります。相手が宣言したカードと、マーク、もしくは数字が同じでなければいけません。もし、出すカードがない場合はパスをしてもいいです。パスは、出すカードがないときにかぎらず、いつでも使えます。それと、このゲームはターン制です。先攻がカードを伏せ、後攻がカードを伏せる。これで1ターンです。そして、1ターンの間に両者の手札がなくなってしまう場合、特別ルールとしてどちらも勝ちということになります。勝った人はセカンドステージに行けます。最後に、ジョーカーチエックを説明します。ジョーカーは、なににでも化けることができるカードです。ハートの2と言いながらジョーカーを出したとします。そこで相手がチエックとやってきて、確認した場合、ジョーカーはハートの2に化けているので、相手のチエックミスとなります。しかし、自分がジョーカーを伏せた状態で、相手が”ジョーカーチエック”と言った場合、ジョーカーを見ぬいたという事で、ジョーカーチエックされたほうが、強制的に負けとなります。逆にジョーカーチエックでミスをした場合、ミスをした側が負けとなります。以上で説明を終わります。」

やっと説明が終わった。

ルールは結構難しいようだ。

これは、ただの運ゲーに見せかけた、心理ゲーだ。

「それでは、向こうに個室がございますので、そこでパートナーと勝負して下さい。勝者は、私のところへ来てください。負けた方はその個室で死ぬこととなります。」

死ぬのか。やっぱり死ぬのか。

みんな、想像できていたのか、なにも言動を発しなかった。

「浩太くん、ちょっといいですか？」

祐悟が話しかけてきた。

「僕に、作戦があるんです。この作戦通りに行けば、二人とも2nd STAGEにいけますよー!!」

「(;) 。 。 () 。 。 ;) 。 。 (;) ナ、ナンダッテー!!」

祐悟の作戦とは一体

1 r d S T A G E ルール説明(後書き)

感想評価お願いします

1111は騙し合いのゲーム。

「(；。)。。(。；。(。；)ナ、ナンダッテー!!!」

俺は、びっくりしてしまった。

こんな奴が、作戦を立てるなんて。

「はい！この作戦通りに行けば、二人とも2nd STAGEにいきます」

「ほ、本当か！そ、そ、その作戦ってどんな奴なんだ?!」

俺は、一刻も早くその作戦を聞きたかった。

「説明しますね。まず僕からです。僕がまずはじめに、ジョーカーをだす。その次にあなたが、何かの1を伏せて下さい。その後、僕が1を伏せます。そしてあなたが1を出し、また僕が1をだす。そうすると、1が4枚使われましたので、1はもうなくなります。そして次にあなたはパスをします。そうするとまた僕のばんです。そして、最後に出した1と同じマークの2を出します。その後、あなたは何かの2を伏せます。その次僕が2を、あなたが2を伏せます。次は僕のばんですが、もう2は4枚使ってしまったのでパスをします。そしてあなたがそのマークと同じ3をだす。これを繰り返すと、最後の5を僕が出し、ラストにあなたがジョーカーをだす、そうすると1ターンの間に二人とも手札がなくなるため、どちらも勝ちとなるわけです!!!」

「すごーい、よくそんなの思いついたなww」

感動している浩太。
スーパードヤ顔を浮かべる祐悟。

「はい、それでは！準備ができた組は向こうの個室でバトルして下さい。勝者は私の方へ伝えに来て下さい。」

拓哉がそう説明を付け足した。
ついにバトルが始まる。
だがしかし、最強の作戦のおかげで無事2ndSTAGEに行けそうだ！

「それじゃあ、早速行きましょう」
「おう！」

個室の中へ入った。
そこはテーブルが1台あるだけであり、他にはなにもなく、薄暗いところだった。

「じゃあ、はじめましょう。僕からですね。ジョーカーです。」
「通しだ クローバーの1」
「通しです ハートの1」
「通しだ！ スペードの1！」
「通しですね ダイヤの1！」
「よし、じゃあ、俺はパスだ！」

このまま行けば、俺らはrndSATGEへ！

「ダイヤの2です！」

「通しだ！ スペードの2！」

「通しです ハートの2！」

「通し！ クローバーの2！」
「僕はパスをします！」
「じゃあ、クローバーの3！」
「通しです ハートの3！」
「通し！ スペードの3！」
「通しですね！ ダイヤの3！」
「俺はパスだ！！」

よっしゃア！まってるよ！春菜ちゃん！

「では、ダイヤの4！」
「通し スペードの4！」
「通しです ハートの4！」
「通し！ クローバーの4！」
「僕はパスを選択します！」
「よし！クローバーの5だ！」
「通しです ハートの5！」
「通しだ！！ スペードの5だ！」
「通しです！！！ ダイヤの5！！！」
「ここで俺がジョーカーだ！！！」
「……ジョーカーチエツク。」
「……え？」

ど、どういうことだ？

ジョーカーチエツクだと……？！

「おい……祐悟……？」
「……クツクツクツク……お前は馬鹿だ……馬鹿だな……！」
「なに……?!」

「俺の作戦通りに動いてくれちゃってよお……！」

「騙したのかてめえ!!!」

「さっきのあの行動を見て、こいつは早く潰さないと考えたんだ。」

「…くそっ」

「ありがとよ…! ごちそうさま…」

祐悟は嘘をついていたのだ。

自分が勝てるように、うまく積み上げて。

二人の勝ち登っていくかのように見せ立ててだ。

「……ぷっ」

「なにを笑ってるんだ、中村ア。今のお前に笑う暇なんかあんのか？死ぬんだぞ？」

「…確かに、俺は馬鹿だ…でもなあ……オメエのほうが大バカなんだ…!!」

「なにを言うかと思えば、戯言か。」

「これを見るよ…。」

浩太は捨て札の一番上のカードをめくった。

そこには、クローバーの3があつた。

「?!」

「ジョーカーエックといったな…、祐悟…。」

「ど、どういふことだ貴様…!」

「お前の作戦通りに動くはずがねえだろ、馬鹿が」

「なんだと!？」

「俺は、人間が嫌いなんだよ。だから、お前のことを信じるはずがないだろ…。」

「ふざけんじゃねえよ!!!」

「ジョーカーエックミスだ。残念だったなあ 愚か者が…」

その後二人は殺された。

ここは騙し合いのゲーム。

いつでも疑いの目を忘れないようにしなければならぬ。

浩太のいのちは、何処まで続くのであろうか…

「まってるよ…春菜ちゃん……今行くからな…。」

「」は騙し合いのゲーム。(後書き)

感想評価お願いします

1rd STAGE 終了のお知らせ

2nd STAGEが始まるまで、まだ時間がたっぷりある。

この時間を無駄にする訳にはいかない。

浩太は持参してたカバンから黒いポーチを取り出した。

そのポーチからはなんとPSPが出てきた。

浩太はPSPを肌身離さず所持している。

そして、モンハンを始めた。

モンハンプレイ時間ー1457時間

真のオタクだ。

世界のモンハンプレイヤーが認めるネ申プレイヤーである。

よくある改造データよりも強い。

「さてと、なに行こうかな。うーん、今暇だからなあ、《終焉を喰らう者》でいいや」

なんと、村クエでありながらも上位級のレベルのヤツらが出てくるあのクエストだ。

一応村クエのため、一人でしかやることはできない。

だから、これをクリアしてる人は相当な腕があると考えてもいいだろう。

浩太はこれを軽く100回はクリアしている。

しかも、10分かつからずと終わらせてしまっ。

すごすぎる。さすがネ申プレイヤーだ。

すると今度は 아이폰を開きだした。

何やら Twitterをやっているようだ。

「終焉を喰らう者なっ」

こんなことを書きこむほど暇なようだ。

数時間後

浩太はモンハンに飽きたのか、急に電源を切り、立ち歩き出した。浩太の向かう先にはW、Cがあった。

「ワールドカップ遠いな。あ、ワールドカップっていうのはトイレのことだよ。」

なぜ、ワールドカップ＝トイレになるかって？

簡単だよ。W、Cってワールドカップと読めるだろう。

浩太はこんな変なところに頭がよく回るがちゃんとした勉強は全くできないorz

「（、、）＝3 フウ 気持ちかった」

浩太はしばらく我慢していたようだ

「さてと、ひまだなあ、ニヤ動でも見てよっと。」

浩太はニヤニヤ動画でアニメを見だした。すごい集中力だ。

目をキンキンに開いてみている。よっぱどアニメが好きなんだろう。

「うほっ、ツンデレ最高だノノノ」

ひとりごとも多くなってしまうらしく

浩太はブツブツしゃべっている

はたから見ると変質者だ。

また数時間後

「はいはい、みなさん。1rdSTAGEが終了しましたよっ」

浩太はアニメに夢中で拓哉の声が耳に入ってきていないようだった。

「ちょ、ちょっと、君。説明始まっちゃっよ」

心優しい女性の方が教えてくれたお陰で

浩太はふっと我に返った。

「あ、ああ、さんきゅうな姉ちゃん」

浩太はそう礼を言うと

そそくさとはしって逃げてしまった。

「すたこらさっさ あ すたこらさっさ」

浩太は一人でそう言いながら走っていった
向かう先はワールドカップだった。

「それでは皆さん！これから2ndSTAGEに入ります！ この
ゲームの参加者は全部で68名。そしてこの1rdSTAGEで半
分の人たちが死にましたので34名が2ndSTAGEにいけます
！」

うおおおおおと歓声が上がった。

「そして、この2ndSTAGEから3rdSTAGEにいけるの

は、なんとわずか10名です」

会場は緊張感に包まれた。

空気はピリピリしている。

浩太がワールドカップから出てきた。

「うっは〜！すっきりした！」

浩太の声は会場全体に響き渡った。

みんなが一斉に浩太に視線を集めた。

「え、あ、その……」

空気が読めた浩太はしょぼしょぼとみんながいる方に向かった。

「取り乱してしまいましたが、説明を開始します！」

2nd STAGEは一体どんなものなのか

1 r d S T A G E 終了のお知らせ(後書き)

感想評価お願いします

二度と生きたいなんて言うんじゃないねえ

拓哉が2nd STAGEの説明を開始した。

「2nd STAGEは、運動会です！」

「はあ？運動会？」

浩太はふざけてるのかと言いたげな顔でそういった。すると、一人の男性がこういった。

「運動会だあ？ふざけてんのか！！」

浩太が言いたかったことを何の躊躇ためらいもなく言い放った。

「ええ、ふざけてますよ」

拓哉はニコニコしながら答えた。

すると周りの人達が一齐に批判の声を上げた。

そりゃそうだ、こっちは命がかかってる。

命をかけたゲームをふざけてやっているということだ。

そりゃみんな腹立つのもわかる。

「こっちは命がかかってんだぞ！！」

一人の威勢のいい男性がそういった。

拓哉はこう即答した。

「命がかかってるからこそ、楽しむんじゃないですか。貴様らのほ

とんどはここで死ぬ運命なんだ。最後に少しでも楽しみたいだろ？」

拓哉の言葉は一同を唾然とさせた。

こいつは…人が死ぬのを楽しんでやがる。

みんながそう解釈したなか、浩太はわかってなかった。

「運動会か、面白そうだな！」

浩太がまたKY発言した。

だが、浩太は気付いてないようだった。

「楽しむときは、とことん楽しもうぜ！そして自分の力で勝つんだ
！」

周りの人達はこうたがなにを言ってるか分かんなかった。

もし、それで他の人が勝てば、自分は死ぬんだ。

それなのにあいつは、なにを考えているんだ。

みんな、そう言わんばかりの表情を浮かべていた。

「みんなはどうせ、負けたら死ぬって考えてんだろ？」

浩太がそういった。

みんなの視線が浩太に集まる。

「んなこと考えてっからだめなんだよ！」

浩太の表情が変わった。

今まではおちゃらけた奴だったが、急に真剣な顔になった。

「勝って生きることだけを考えるんなこともできねえ奴が”生き

たい”なんて口にすんじゃない

その言葉はみんなの心に響いた。

「わかったか！」

『おおおおお！！！！！』

みんなとの心がひとつになった瞬間だった。

「ふっ、くだらない。所詮戯言だ」

拓哉がそう言うともみんなが批判コメを浴びせた。

拓哉は批判コメに耐え切れず

「うるっせえんだよ！！！！」

と叫んでしまった。

「お前ら…どうせ死ぬんだぞ？それが速いか遅いか、ただそれだけだ。なにに感動してるんだ？そんな友情ごっこ、さっさとやめてしまえ」

拓哉が放った言葉は、みんなの怒りゲージをMAXにさせた。

みんなは怒りを抑えきれなかった。

「ぜってえ、俺が1位になって、お前らみてえなヤツらを全員ぶっ潰す！！」

拓哉はそんな言葉は聞きもせず、説明を再開した。

「今回の運動会は、障害物リレーです。順位の1位から10位までが3rd STAGEに行けます。ルールなんて有りません、とりあ

え、障害物を乗り越えて先にゴールすればいいのです。」

なんとも簡単なSTAGEだ。

「よし、やってやらア!!!」

みんなはやる気満々だった。

「それでは、運動場へ移動して下さい。」

移動するとそこには障害物がそびえ立っていた。

「全部で6個の障害物があります。これを乗り越えない限りゴールできません、せいぜい死なないうよう頑張ってください。」

拓哉は呆れた顔でスタートラインへと向かった。

「こつちに来て下さい、ここからstartです。」

2ndSTAGEが始まる。

絶対春菜ちゃんを助ける!!!

拓哉が拳銃を空に向けた。

「よーい… パアアアン!!!」

二度と生きたいなんて言っくんじゃねえ(後書き)

感想評価お願いします

大運動会開催

てーんててててーんててててん
てーんてーんてーんてーん
てーんてーんてーんてーん

グルメレースが華麗になりだした。

「ちくしょう！何処までふざけとんじゃ！」

こうたがさけんだ
すると、拓哉がこういう。

「はい、はしってはしって、遅いですよ皆さぁーん」

そんな言葉は無視して走る。

まずは大きな壁を登る。

壁は網状になってるため登りやすい。

「よいさつよいさつあらほいさつさ」

何とか登り終えた。

だが降りるときに網に引っかかってしまい。

飛び降りたが、顔面から落ちてしまった。

拓哉は腹を抱えて笑っていた。

「いってえよぉ……」

顔を抑えながらも走る浩太。

「走れエロス！！」

拓哉は浩太に向かってそういった

「誰がエロスじゃ！！」

浩太はそう突っ込んだ。

そんな余計なことしている間に

浩太は最後尾になってしまった。

「ぬああー！最下位やんけ！！」

浩太は全速力で走った。

だが直ぐに次の障害物が…。

次の障害物はよくありがちな

「吊るされたパンを飛んで食べる」

つていうやつだ。

浩太は飛んだ。飛んだ飛んだ。

飛んだと言うより、跳ねた。

幸い浩太は背が高い方だったためそこはすんなりクリアした。
すると浩太は一気に3位まで上がった。

「よっしやい！」

みんなはまだぴよんぴよこ跳ねてる。

そんななか浩太はドヤ顔で走り続けた。

浩太は滑らせてパンを落としてしまった。
すると拓哉が

「パンは全部食べなければいけません、落とした場合はもう一度パンにかぶりついて下さい。」

と言った。

ということはもう一度戻って跳ねてこいということだ。

「えええええー?!」

大運動会開催（後書き）

感想評価お願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2301y/>

人間はクズ いや、俺は人間のクズ。

2011年11月29日00時49分発行